

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：83101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K11948

研究課題名(和文) 博物館と地域との連携を通じた災害の「記憶」「記録」の活用についての研究

研究課題名(英文) Study on usage method of "memory" and "record" of disaster through collaboration between museum and area

研究代表者

田邊 幹 (Tanabe, Motoki)

新潟県立歴史博物館・その他部局等・研究員

研究者番号：50373478

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)： 地域において震災および戦災の記憶・記録をどのように保存・活用していくか、また地域博物館がそれらの活用にもどのように寄与していくことができるか、を検証するため、戊辰戦争、アジア・太平洋戦争の2回の戦災で大きな被害を受けた新潟県中越地域を中心に、その活用の実際について調査を踏まえ、「戊辰戦争の戦跡を歩く」という博物館の学習プログラムを試行し、参加者および地域への波及効果について検討した。その結果、博物館の強みである実物資料へのアプローチと現地の持つ景観、地形、人材を複合させることによって、来館者の満足度を上げ、地域へは顕彰活動のやりがいをもたらすことができる可能性があることを実証できた。

研究成果の概要(英文)： I studied what can the regional museum contribute to preserve and utilize the memory and record of earthquake and war damage, and reconstruction from them. In order to this study, I studied the mainly in Niigata Prefecture Chuetsu area which suffered major damage in the Boshin War and the Asia-Pacific War 2 war disasters, and try museum learning program with local. Walk through the Boshin war battlefield, and examined the ripple effect on participants and the local. Combining the actual in museum and the field visit is effective way for both region and participant.

研究分野：博物館学

キーワード：博物館学 災害 地域連携

### 1. 研究開始当初の背景

近年、東日本大震災をはじめとする大規模災害が頻発し、その復興に際し、道路・鉄道といったインフラ、ハード面だけでなく、人びとがその被災地に生きる意味を持ち続けるというソフト面の復興とその持続が大きな課題となっている。一方で、『震災遺構』として「記憶」「記録」を伝えるものとして保存されることが決まったものもあるが、保存・撤去の決定が十分な検討を経ないまま行われているものも多い。これは震災の「記録」「記憶」の活用についての実績や研究が蓄積されておらず、その方法が確立されていないことが原因である。

一方で全国の自治体に数多く設置されている博物館では、災害に際し文化財レスキュー事業などを通して、地域の災害の「記録」「記憶」を繋ぐ活動を行っている。また、博物館においては日常的に文化財を活用した学習プログラムを開発、実施してきている。そこで、震災の「記憶」「記録」の保存・活用に博物館が持つ学習プログラムの開発・実践のノウハウを活かし、かつそれらを保存していく地域に還元することができるのではないかと考えた。

### 2. 研究の目的

震災の「記憶」「記録」の活用方法とその効果を、実際に学習プログラムを開発し試行することによって、その有効性を明らかにする。特に現地への波及効果に注目し、博物館が地域に対してどのような貢献ができるのか、博物館の持つ可能性について明らかにする。

### 3. 研究の方法

上記の研究目的達成のため、新潟県中越地域を主なフィールドとして設定する。新潟県中越地域は、戊辰戦争、アジア・太平洋戦争の2回の戦災で大きな被害を受け、かつ平成16年の中越大震災で大きな被害を受け、そこから復興してきた歴史を持つ。また、当該地域において研究代表者が所属する新潟県立歴史博物館は平時の博物館活動に加えて、文化財レスキュー等の災害対策事業も行っている実績がある。

「記憶」「記録」を活用した学習プログラムの試作のため、以下について調査・研究を行う。

当該地域における災害の様相について、現在までの知見・研究成果の見直しを行うとともに、新たな資料の調査・発掘を行う。

現在各地で行われている災害の顕彰・継承活動の把握。

災害を広く捉え、戦災も含め、災害の顕彰・継承活動の実際と地域の有り様について他地域の事例や歴史上の事例について検証し、学習プログラムの試作に資する。

以上を踏まえ、参加者および地域にとって有効な博物館学習プログラムを開発・試行し、

参加者および地域にとっての効果をアンケート調査やその後の地域での活動から検証し、有効な方法について検討する。

### 4. 研究成果

学習プログラムの前提となる個別の事象についての成果から報告する。

まず、長岡における戊辰戦争からの復興と地域について、幾つかの新たな知見を得ることができた。例えば、戊辰戦争によって落城した長岡では城下の多くが焼失され、人びとは、藩兵とともに会津若松、米沢、仙台と逃れた者、近隣の農村に逃れた者、焼残った城下にそのまま居留した者に分かれたと言われているが、その中で焼残った城下に居留した者たちが、一軒に2家族、3家族が肩を寄せ合って、場合によっては20人以上が生活していたことが分かった。この状況が具体的にいつ頃まで続いたのかの検証は資料的制約からできていないが、明治2年の段階で、長岡藩の刀隊の戦死者を検証する碑が建立され、そのための募金活動も行われていることが分かった。これは戦死者を弔うということが目的とされているが、その碑を残すことによって結果的に「記録」を作成し「記憶」を残すことになった早い事例と言える。同様の事例は戊辰戦争の戦地となった地域でも見える。

次に、戦死者の弔いに続く活動について、小千谷市の浦柄地区を例に報告する。浦柄地区は越後の戊辰戦争の中でも激戦として知られる「朝日山の戦い」の舞台となった地域であるが、戦後すぐから会津藩などの戦死者を弔い、墓石を建立している。当初は兵士が戦死したその場所に墓石を立てており、弔いとともに、その「場」の記録としての意義があると考えられる。

その後、麓の浦柄神社には戊辰戦争の戦死者の忠霊塔が建立されたようで(風化のため建立年不明)あるが、昭和16年には長岡出身の山本五十六の揮毫による「戊辰戦跡記念碑」が立った。これは浦柄神社が戦死者の弔いの場としてだけではなく、朝日山の戦いを「記録」し「記憶」していく場として認識されていたことを示すものと言えるだろう。また、昭和28年には山内各地にあった戦死者の墓に加えて、浦柄神社内に戦死者の墓が建立され、弔いの場および弔うことによる「記憶」の継承の場となっていくことができる。これらは地元の浦柄地区が主導して行っており、浦柄地区ではこれらの活動を通して、地域の歴史＝「記録」「記憶」(浦柄村は戊辰戦争で焼き払われているので災害の歴史でもある)を継承してきたということができる。

また、この朝日山古戦場は平成16年の中越大震災で大きな被害を受けたが、自治体・地域等の尽力によって再整備され、現在も毎年、浦柄地区の遺跡保存会によって整備されており、浦柄地区のアイデンティティとなっ

ている。

もう一つ、災害(戦災)の「記憶」の変化、継承として、長岡における河井継之助の「記憶」について紹介する。周知のように河井継之助は長岡藩の軍事総督を務め、北越戊辰戦争を主導した人物として知られている。戦後すぐは河井継之助の墓が倒されたり、遺族の家に石が投げ込まれたりするなどということがあったと言われている。しかし、大正時代に入ると河井は顕彰の対象となり、昭和前期には新潟県からの叙勲候補者となっている(実際に叙勲はされていない)。この間、およそ50年の間に河井に対する評価が変わってきたといえる。この評価の変化に大きく寄与したのが今泉鐸次郎の『河井継之助傳』など郷土史研究の隆盛である。今泉は『河井継之助傳』の序文の自序で、「実歴者の談話、諸記録、日記」などを収集し、客観的に記述したとしており、戦争を指導し、結果的に町を焦土に帰させたという結果にたいする評価だけではなく、人物そのものについての評価への道筋をつけている。この活動を始めるまでに長岡落城からおよそ30年、成果として『河井継之助傳』が刊行されるまでおよそ40年が経過している。この時間と、この間の長岡の復興が河井の評価の返還を可能にしたと言える。この城下を焼尽に帰した原因を作ったのであるが、人物として誇るべき人物という評価軸が現在の河井観といえ、この戊辰戦争直後からの「記憶」の変遷を見ることが出来る。

これらの成果を踏まえ、博物館と地域とが連携した現地を巡る学習プログラム「戊辰戦争の戦跡を歩く」を実施した。実施日は平成30年10月29日(日)定員は20名であった。10月29日に設定したのは戦場跡の下草がある程度枯れて見通しのいい時期、かつ比較的天候が安定している時期であるからである。定員が20名というのは、細い道を通るため大型バスの通行が不可能であること、実物の資料を閲覧するプログラムがあるため、大人数では対応が難しいこと、などが要因である。当日のプログラムは以下の通り。

集合-光福寺(長岡市撰田屋町、長岡藩本陣跡)-朝日山古戦場-八丁沖古戦場(北越戊辰戦争伝承館)-長岡市立中央図書館(資料閲覧)-解散

このプログラムを作成するに際し留意したことをいくつか挙げておく。一つ目が、通常博物館で行う学習プログラムと違って、現地を巡るといふことの意味を重視したことである。具体的には、地点間の距離を体感すること、である。実際の移動はマイクロバスであるが、戦闘の拠点となった本陣と戦場との距離、味方の陣と敵陣との距離等を体感するということである。次に地形を体感するということである。地形はマクロには全体の地形を戦場から見た景観で体感し、ミクロには山道の険しさや残された塹壕、戦死者が出た地点の戦場での意味について考え、体感する

ことである。二つ目が、博物館や図書館で所蔵する資料と地域の関連性である。博物館にある資料は「博物館行き」という言葉が象徴するように、地域から切り離されているかのような印象を持たれるが、実際の資料(絵図・記録)に記されていることが現在の現地でも確認できることを体感できるものを選定した。三つ目が地域への波及効果である。先に述べたように朝日山古戦場は地元浦柄地域で遺跡保存会があり、毎年整備を行っており地域のアイデンティティとなっている。このため訪れる、活用することが地域にやりがい、誇りをもたらすことになると考えられる。また、北越戊辰戦争伝承館も北越戊辰戦争後半の激戦地となった場所で、伝承館自体は長岡市が設置したものの、展示資料は地元地域に残ったものが多く、運営にも地元地域が深くかかわっている。

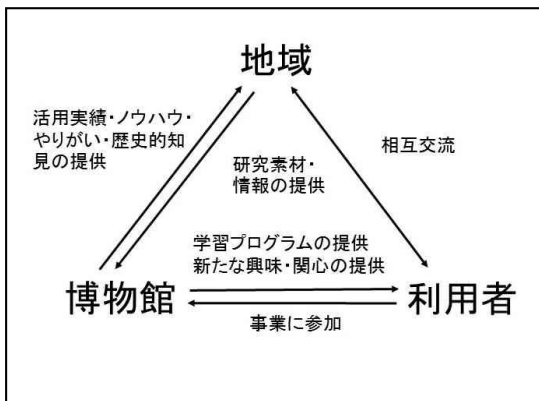
なお、当日は台風の接近と大雨により朝日山古戦場への訪問は40分~50分の山道の徒歩が必要とされ、危険であるため予定を変更し、中越大震災のメモリアル施設である「山古志復興交流館おらたる」を見学した。朝日山古戦場も中越大震災で被害を受け、そこから復興し現在も地域のアイデンティティの源の一つとなっており、戦災の「記憶」「記録」である戦跡が、災害によって破壊されてもそれを復興させることによって、新たな地域のアイデンティティが生まれた事例を紹介できたといえよう。

次に参加者の反応、アンケート等から災害の「記憶」「記録」を活用した博物館の学習プログラムの可能性について紹介する。基本的には好意的な意見が大勢を占めたといえる。特に現地を見ることはなかなかできないこと、現地を見る見学ツアーはあっても資料の解説と組み合わせたのプログラムはあまり例がないが理解しやすいとの意見が多かった。概ね狙い通りの結果であったといえる。一方で、やや内容が難しかったという意見もあり、現地と博物館(資料)との組み合わせをよりわかりやすく伝える工夫が必要であると考えられる。今後の課題である。

最後に博物館活動からみた災害・戦災の「記憶」「記録」の保存・活用について。近年、博物館の地域貢献の重要性が強調されるとともに、災害時には博物館は何ができるか、どのように被災地に貢献できるのかが問われている。このような状況の中、博物館の強みである歴史は地域のアイデンティティと密接に結び付き、その歴史を継承し、活用することが地域のアイデンティティを繋ぐものであるといえる。当研究において、地域の中で災害の「記録」「記憶」は変化しながら継承され、活用されることによって継承されてきたことが確認された。これらを広く公開し、活用するために博物館の持つ資料(収蔵資料)および人材、ノウハウは非常に有用であるといえる。近年、「地域資源」という言葉があるが、地域にある災害の「記憶」「記

録」はそれだけで「地域資源」と成りえるわけではなく「資源化」が必要な場合もある。博物館の持つ調査・研究機能はこの「資源化」に貢献し、同じく博物館の持つ教育・普及・交流の機能は地域にやりがいを提供し、アイデンティティを強化する可能性を持つといえるだろう。

概念図



6. 研究組織

(1) 研究代表者

田邊 幹 (タナベ モトキ)

研究者番号 : 50373478

(2) 研究分担者

福留 邦洋 (フクトメ クニヒロ)

研究者番号 : 00360850

(3) 連携研究者

( )

研究者番号 :

(4) 研究協力者

( )

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計0件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

出願年月日 :

国内外の別 :

取得状況 (計0件)

名称 :

発明者 :

権利者 :

種類 :

番号 :

取得年月日 :

国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等